

令和2年度 第2回 埼玉県社会教育委員会議 会議録

1 日 時 令和2年11月17日(火) 14:00～16:30

2 会 場 加須げんきプラザ

3 出席した委員 (13人)

生駒 章子委員、猪俣 敏裕委員、大矢 美香委員、柿沼トミ子委員、
川端 貴雄委員、木下 博信委員、坂口 緑委員、高澤 守委員、
立山 優二委員、長坂 道子委員、芳賀 洋子委員、又野亜希子委員、
和田 明広委員

4 欠席した委員 (7人)

青山 鉄兵委員、有田るみ子委員、内田 剛史委員、風間 重文委員、
寺山 昌文委員、西村 平雪委員、米澤三八子委員

5 あいさつ

埼玉県教育局市町村支援部 古垣玲 副部長

6 議事の経過

(1) 議長の開会宣言

(2) 会議の公開・非公開

議長が会議の公開・非公開を委員に諮り、公開とする。
傍聴者なし

(3) 会議録署名委員の指名

議長から和田委員と生駒委員が指名された。

(4) 議題

ア 議題及び施設概要説明・施設見学

(議題)

○ 社会教育と現代的課題について

(施設概要説明・施設見学)

○ 加須げんきプラザの施設概要説明、施設見学

イ 経過

(議題) 社会教育と現代的課題について

議長 議事の「社会教育と現代的課題」について、事務局から説明をお願いします。

事務局 これまでの社会教育委員会議では、外国人の増加に伴う現代的課題である共生社会の実現に向けて話し合ってきた。その成果として、令和2年度から「外国人親子への支援と地域住民とのつながりづくり」モデル事業がスタートした。

前回の会議では、社会教育施設の中でげんきプラザを例に、その役割と取組について様々なご意見をいただき、事務局からはげんきプラザが行っている不登校や障害といった現代的課題を抱える児童、生徒や家庭への取組について説明した。

県としては、既に行っている外国人との共生社会実現に向けた取組や、げんきプラザの取組に加えて、「誰ひとり取り残さない社会の実現」のため、多様な現代的課題に社会教育の立場からアプローチする取組を進めてまいりたいと考えている。

私たちの社会は、例えば、「子供の貧困」の問題や、「ひきこもり、不登校の増加」、「スマホ、ゲーム依存の増加」、「少子化・超高齢社会の到来」など、様々な現代的課題を抱えている。

そのような課題の当事者たちは、生きづらさ、困難さを感じながら暮らしており、社会教育の取組がより必要とされる。

今回の会議では、県として社会教育の立場から今後どのような課題に重点的に取り組んでいくべきかについて、ご意見をいただきたい。

議長 大きなテーマである。子供たちを取り巻く環境や、学校外教育で何ができるのかといった点を併せてご検討いただきたいが、議論の口火を切るという意味で家庭教育アドバイザーとして活躍している二人の委員から意見をいただきたい。

委員 私は、家庭教育アドバイザーと親業訓練という親子のコミュニケーションプログラムのインストラクターをしている。実際に困っているという親御さんが相談にいらして、実際に関係を変えていくということをしている。

コロナ以降、家族から直接相談に行くのはダメといわれる人もいて、対面でやるハードルが上がっているので、オンラインでもやっている。

このコロナの状況で、もっと困る親が出てくると思っていた。ところが、私が相談を受けているところでは、困っている親は増えなかった。

コロナ後の状況が二極化していると思う。

自分は自分だし子供は子供と、お互い一人の人間なんだと考えら

れる親は問題解決に向かう、そうでない方は更に悪化してしまうという二極化を感じる。

不登校の相談も受けているが、このコロナの期間、不登校や行き渋りの相談がとて多くなっている。緊急事態宣言のあと分散登校になったが、その頃からしばらく小学校1、2年生の相談が多かった。子供も親も困っていた。

それまで、うちの子は大丈夫だと思っていたが、学校に行かなくなってしまったという方もいた。小学校1、2年生が一番多いが、どの学年も不登校が増えていると感じる。

資料を見ると、平成26年から平成30年までに不登校が1.5倍ほどに増えている。この間に、「辛かったら休んでもいいよ」という風潮が出てきているので、それで増えている面もあるのかなと思うが、それにしても多い。

私の下の子供が今、高校1年生だが、中学の時、不登校の子が必ずクラスに1人か2人いた。資料にはないが、不登校は中学3年生が一番多く、いじめは中学1年生が一番多い。また、子供の自殺は高校生が多くなっている。

不登校以外の相談ではネット関連、スマホとY o u T u b eに関わるものが小中高を問わず多い。私のところに相談に来る方は、自分が変わろうという意識の親が多いが、一方で自分が変わらずに子供だけを変えようという意識の親が大勢いる。

不登校の場合は、親が変わりやすい。いったん落ちこんで、しかし自分が変わらなければ子供も変わらないからということで親が変わっていくケースが多い。ところが、子供がゲームやスマホを夜遅くまでやっている場合は、親が変わりにくいと感じる。

社会的な課題の一つとして、時間を制限するとか、ルールを決めるとか、ちゃんとできるところはできるが、できないところはできない。SNSやネットの使い方は中高生になってからでは遅いので、もっと早いうちに県などが子供にも親にも周知していく、そして親が変わる必要性というものを伝えていただけたら嬉しいと思う。

不登校になってしまう原因の中に、起立性調節障害というものがあり、これが非常に多い。ただ怠けているだけだと思って、親も子も辛くなってくるところがあるが、相談に来られる方はそういった障害の場合も多いので、支援をする人がいろいろな知識を持っておくことが大切と思う。

最後に、私として最も危機に感じているのは、8050問題、いわゆる大人の引きこもりである。これは不登校がそのままつながっている。社会として取組が必要と感じる。

議長 ネット依存について親の対応をどうするのかというのは新しい知見だと思う。起立性調節障害についても関わる大人たちがもっと知っておくべき問題だ。

それでは、もう一人の委員からお話を伺いたい。

委員 加須市内の家庭教育アドバイザーで集まりサークルを作って活動

している。

活動の一つとして、市と共催で月1回の子育てサロンをしている。お父さんやお母さんがお子さんを連れて遊びに来て、その時々によってリトミックをしたり、栄養士さん呼んで子供の体重や身長を測り、子供の育ちなどに関する相談を受けたりしている。

イベントの後に30分ぐらい、座談会で参加者同士交流したり、相談を受けたりする時間をつくっている。相談というよりは、「私の話を聞いて」という方が多い。

核家族が増える中でお互いの人の結び付きを求める方は多い。子育てサロンに来るお母さんは子育てについて前向きな人が多く、話を聞いてもらいたい、ママ友をつくりたい、互いの子供同士で遊ばせたいという思いを持っている。

本来であれば育児や家庭について問題や困難を抱えている方に来ていただきたいが、そういう方は中々足が向かない。そのため、埼玉県家庭教育アドバイザーでも、地域によってはショッピングモールで子育てサロンを開くなどの取組をしているところもある。

加須市に「あすなる園」という、障害をお持ちのお子さんや、発達に遅れのあるお子さんをお持ちの親御さんが、親子で来れる施設がある。

建物の耐震性に問題があるため廃園の可能性もあり、来年度できるかは未定だが、私達家庭教育アドバイザーが間に入って、市と共催で障害児や発達に遅れを持つお子さんを持つ親子対象に子育てサロンを計画している。

主に親御さんの相談やお話を聞く機会はその子育てサロンと「あすなる園」がある。社会的な家庭教育の問題としては、ひきこもりとか社会的格差とか貧困といったことがあると思うが、私達が行っている活動では身近な悩みの相談が多くて、離乳食がなかなか進まないとか、イヤイヤ期でまいってしまってどうやって子供に関わったらいいかわからないとか、どうやって叱ればいいのか、つい子供を追い詰めてしまうといった相談がある。

私の仲間には保育士や幼稚園教諭の経験がある方が多いので、経験を生かして相談に乗ったりアドバイスしたりしている。

「あすなる園」の方では、お子さんの発達に遅れがみられる方から、「これからどうやって育児していくのか、先が見えない」という相談や、育児の情報がスマホやインターネットからどんどん入ってくるので、一般的な成長のお子さんとは違って、「本当にあの子は どうして」と苦しい悩みを打ち明ける人もいる。

サロンにしても「あすなる園」にしても共通して聞こえてくるのは、スマホ育児に関する悩みだ。いけないと思いつつも与えてしまう。年長さんぐらいになるとこちらが叱っても「ママだって見ているでしょ」と子供に言われ、ついつい自分のことも反省してしまう。

時代の背景として核家族で共働きの家族が多い。忙しい中での子育て、手のたりない中での子育てでスマホに頼ってしまう。スマホは悪であるように捉えられがちだが、園によっては保育園でもタブレットを導入しているところがある。これからは教科書がタブレット

になっていくという。親としては、うまくスマホやタブレットと関わって行くことが大事だと思う。

オムツを変えながら、母乳を与えながらスマホを見せてしまうお母さんが多い。本来であればその時こそがお子さんとのコミュニケーションの場になる。育児におけるスマホの使い方についての講座も、お母さんになってからではなく、妊娠中から受講していただく機会があったらいいのではないかなと思う。

それと共通して相談が多いのは、ワンオペ育児だ。ご主人の帰りが遅い、単身赴任、離婚されているシングルの方などは、一人で育児を全て抱えて苦しさを感している。これは健常者のお母さん、お父さんも障害を持つお母さん、お父さんも共通しているのかなと思う。

私がこれからの課題と感することが二つある。一つは、「子育て支援」というとついお母さんと子供の支援と感してしまうが、これからの時代はお父さん、おじいちゃん、おばあちゃんも含めて、家族・家庭の支援をしていく必要があるということだ。

もちろん、お母さんも辛い。でも、お父さんも「悩んでいるんだな、苦しいんだな」と感する場面に出会うことがある。例えばサロンでもお母さんたちの中にお父さんもいらしてくれる。そこで愚痴をこぼして帰る。

「うちは共働きだが、負担を分担するといいいながらも、妻の方が家事、育児での負担が多い。自分もなるべく出来ることは手を貸したいと思って家事、育児に協力していくつもりだ。時間に追われ、妻も子供に対してついイライラしてカッカしてしまう。本来ならそこに助けを出すのが父親のはずだが、自分にも余裕がない。仕事で目一杯、帰ってきたら家事もある育児もある。自分も目一杯だ。本当に忙しい」

これが共働きの家族が抱える悩みなのかなと思う。

「あすなろ園」でも、そういった声があった。障害のある子供を連れてきてくださったお父さんが、「うちは子供が4人いる。そのうちの一人がこの子だ。私は単身赴任で、一週間に一回だけ家に帰れる。ゆっくりしたいと思うが、妻に休みのときくらい子供をみてよ、家事を手伝ってよと言われてしまう。本当に妻の気持ちを考えれば、そうだなと思うが、私も目一杯だ。」ということ話をしていた。

核家族が抱える悩みだかなと思う。近くに助けを求める人がいない。とにかく家族で生活を回して行かなければならないというところで、苦しさを感している。

おじいちゃん、おばあちゃんも悩みを抱えている。加須市の市民学習カレッジセミナーで「じいじ、ばあばの孫育て講座」の講師となり3回の講座を行った。昔と今の育児の違いだとか、触れ合い遊びの紹介、子育ての情報を提供するといったことをした。

定員いっぱい集まった。おばあちゃんだけでなくおじいちゃんも参加されていた。そこで衝撃だったのは、「孫が可愛いと思えない」という方が数人いらっしまったことだ。

「目に入れも痛くない」とか「子供は大変だったが孫は責任がない」とか「孫は可愛くてしょうがない」と聞えてくるのが多いのかなと思

ったが、「孫が可愛いと思えない」というのは意外だった。

「息子夫婦が共働きで苦しいのは分かるが、家事をするのは全部私。もう本当に辛い。」という方や、「同居していればなんとなく阿吽の呼吸で孫との関わりが分かるのだが、たまに会う孫との関わりが作れない。すごく気をつかう。」という方もいらした。

核家族、共働き家族が増える中で、お母さんもお父さんもおじいちゃんもおばあちゃんも、みんないろんな問題を抱えていると感じた。だから、子育て支援活動は家族全体を支える家庭教育の支援ができたらいいのかなと感じた。人間関係が希薄になる中で、私達家庭教育アドバイザーの役割は大きいと思う。

もう一つの課題は、専門的な知識を持った人の人材育成をすること。ここに任せれば安心と思える組織の形成が大切と思う。

家族の家庭教育の問題は複雑化、多様化している。不登校の問題であったり、貧困の問題であったり、支援する側も専門的な知識を持っていなければならないと思う場面が多々ある。

また、障害についても、私が子供の頃だったら、「あの子はなんか落ち着かないな、変わっているな」で済んでいた子供たちも、今は発達障害、精神障害として位置づけられている。そういった子達がすごく増えてきている。

そういった方を支援する中で、どうしたらいいのと思うことが多々ある。専門的な知識を持った方の人材育成と安心して任せられる組織の形成が、今後の社会教育に必要なではないかと思っている。

議長 子育てサロンでどんな事が行われているのか、どんな方がいらっしやるのか、どんな喧きがあるのか手に取るようにわかった。

今回の議題は「社会教育と現代的な課題」で次年度以降、特に県として重点的に取り組むべきテーマについて広くご意見を頂きたいというのが今回の趣旨だ。

子供たちを取巻く環境や子育てに関わる大人たちの環境、地域の状況など、今頂いた提案から話題を広げていけるのではと思う。

副議長 又野委員のお話を伺って違和感があったキーワードとショックだったのは「お父さんの協力」ということをおっしゃったことだ。

自分の感覚で言うと、「協力」というとお母さんがやる事にお父さんはお手伝いするというイメージだと思う。そもそも子育ては二人で一緒になって行うものだ。もし自分が母親の立場で子育てをしていたら、「協力してやるよ」といわれた瞬間頭にくるだろう。子育てはあなたの仕事でもあると言いたくなるだろうなど感じる。

そう思いながら聞いていて、その自分の感覚はどこで身に付いたのかと思った。そのように思わない家庭が一般的に多いから、仕事から疲れて帰ってきて妻に「手伝って」と言われたら嫌だと感じるお父さんの立場も理解できるという議論になるのではないかと思う。

そう思うと、子育てはお父さんがお母さんに協力するものではなく、お母さんとお父さんが一緒にやるものだ、ということが当たり前の感覚になるような働きかけ、意識啓発みたいなものを、保育園、幼

稚園から小学校までやっていくのに何かいい方法はないかと思う。

県議でもそういう感覚の人が多くなっていて、料理なんかも夫婦二人で仲良く作る。これがもう少し上の世代だと夫は料理が出てくるのを待っているだけなのかもしれないが、今の世代は意識が全然変わっている。二人でやるのが当たり前で、そこに男女どちらの役割という認識はない。

例えばこんなこともある。夫婦で飲食店に行ってお酒とソフトドリンクを注文すると、妻の方にソフトドリンクが置かれる。お酒を注文したのは妻なのに。あるいは、夫婦で旅館に行くと、食事の時妻の方にご飯のおひつが置かれる。夫がよそつてもいいのに。

そういうところに違和感がある。そのぐらい「役割分担」というものが社会にディープに浸透していて、それがストレスになっているのではと、先ほどの話を聞いて感じた。そういう感覚でない社会にしていくにはどうしてらいいのかと思う。

委員 専業主婦のお宅では、育児をするのはお母さんでお父さんは協力する立場という家庭が多いように感じるが、共働き家族はそうした意識がなくて常に2人で家事も育児もという雰囲気がある。

そうしたところをどうやって子供たちに意識づけていくのか。子供は親の姿勢を見て育つ。男の子でも女の子でも、お手伝いをするのはすごく大事だ。家族の一員として、一緒に生活を作っていくことが大事だと思う。

委員 今まで多文化共生をやってきた。まさに私達が思いこんでいる事を、社会に染み込んでいる考え方をどのように変えていくかということとは凄く大きな問題だ。

今、幾つかの例をあげてもらっているが、例えば教科書のさし絵を見ても、海外の教科書ではいろんな顔の子供がいるのに、日本の教科書だと全部男の子は男の子らしい格好をして、女の子は女の子らしい格好をして、外国の子らしい子供はいないという、そういう社会だ。

そういう自分達が当たり前と思っている事を、どういう風に改革していくかということとは凄く大きな問題だと思う。多文化共生でも、人と人が互いの文化の違いがあっても理解しあってとは言いが、言葉で言ってわかった気がしても、それを実際に身に付けて実現することについては全然出来ていないと思う。

そこをどうするかは教育する側の事も含めて大きな問題だし、社会教育の大事なところかもしれないと思う。

委員 社会教育の検討課題で4つのデータを挙げていただいた。私が思う社会教育は誰もが参加できる形で提供する学習の機会だ。

挙げてもらった課題の中では、例えば子供の貧困によって教育を受けにくくなっている子供をどう支援するかというのは、どちらかというと社会教育というよりは学校教育の方で捉えていく分野かなと思う。

ネット依存に関しては、家庭教育が主になるのかなと思う。

3つ目の人口減少というのは完全に社会問題なので、人口減少になった時にどうするのかというのは、社会教育としては考え難いテーマだと思う。

不登校は、基本的には学校教育だろうと思うが、学校教育に馴染めない子供たちに対してどういう学習の機会を与えてあげられるのかを検討する事も社会教育の在り方かなと思う。

私としては来年度この資料の1番の「不登校児童に対する学習の機会」、学校に馴染めない子供たちにも学習の機会を与えられるような何かが出来ないかなという議論をするのも一つの方向性だと考えている。

議長 不登校への支援では、学校への復帰を前提として各市町村で支援が行われている。

学歴達成としては高校を卒業するまでの支援で民間のミニスクールなども動いているのが今の流れだ。そこで抜けているのは体験学習だが、そこは社会教育の得意な分野なので、うまくかみ合えばいいのかなと思う。

委員 私達の所では、障害のある方への支援と障害のあるお子さんを持つ御家族の方のサロンを実施している。

委員がおっしゃられていたとおりの専門的なキーになる人は必要だ。それに加えて、地域、社会の障害のある人たちへの理解が必要だと思う。

社会教育の会議に参加させて頂いて、県の指針を読ませて頂いたり、前回資料を頂いた「障害のある方の生涯学習」を読ませて頂いた中で感じたことは、みなさん専門的に個々の課題にアプローチしていらっしゃるが、それを広く共有してくれる方だとか理解してくれる方が必要であるということだ。

私が県の社会教育に求めるなら、そういう役割、障害のある方への理解ある社会をつくるために旗を振って頂きたい。

例えば、医療ケアを必要とする方が地域で自立していくためには、看護師が必要である。しかし、看護師だけではその方の生活はひろがらない。一緒にボランティアに活動していただける方が必要だ。

定年後の方のボランティア活動のようなインフォーマルな仕組みでないと、障害のある方を支えられないと思う。そういったことも社会教育の役割だと認識している。

専門的な知識を持った人は、つい自分の専門分野を深く知ってもらいたいと思ってしまうが、浅くてもいいから多くの人に知ってもらうことが大切だ。

どうしても課題への対処的な取組を考えてしまいがちだが、社会教育は未来志向で考えたほうがよいと思う。学びの場を通じて社会の新しい価値観を作っていけたらいいと思う。

議長 確かに、課題に対して数値目標を達成するというタイプの事業ば

かりではないと思う。社会の理解を促すためにどんなアクションを考えるかという御提案だと思う。

委員 資料を見ると不登校の児童が増えている。核家族が多い中で、専業主婦は少なくなっているが、不登校の子供たちは日中どうやって時間を過ごしているのかと思う。

家の中に一人でいるのだと思うが、まったく孤立しているのか、差し伸べる手があるのかという点を聞きたい。

7人に1人の子供が貧困状態ということだが、私も子ども食堂を運営している。県内に800校小学校があるが、その一つ一つに、子供が歩いて行ける場所に子ども食堂があるのが理想とずっと言っている。県の方でも福祉部、環境部、商工部、農林部などに連携をしてもらい、社会福祉協議会とのネットワークもつくってやっていくようにお願いをしている。

貧困は私達の頃は物質的に見えていたが、今の子は見えない。子ども食堂も、生活保護家庭だけ対象にすると集まり難く、皆に声をかけると集まってくる。どの子が生活保護家庭なのか分からない状態にしている。親も子供もすごく喜んでくれるが、広がりがない。

その一方で、地域には元気で時間もお金もあるお年寄りがたくさんいる。積極的な人は今でも自分からやっているが、「手を差し伸べる」というのは上から目線に思われるのでは？と心配に思われることや、貧困の状況が今の社会では見えにくいこともあって、高齢者と地域の子育てとの連携は十分とは言えない。子供たちに地域でケアする力がもっと働く必要があると思う。

子供の貧困がよくなっていない状況の中で、学校がキーマンとして何ができるのかと感じる。

それと、自分の孫もそうだがゲームに夢中になっていて勉強をしない。友達との話題についていけないからゲームをしなくちゃいけないとか勝手なことを言う。昔なら取り上げて叩き壊していた。今はそういう時代ではないので出来ないのだが、ゲームに子供たちがはまることを学校として阻止できるのか出来ないのか。

親に問題があると私は思う。親が、子供を実効的にコントロールできていない。親が、どこまで子供の将来に対して責任をもってかかわれるのかと思う。

学校教育が、家庭の教育にまでは口を出せないとしても、子供たちは先生を尊敬していると思うので、少しはそういう事が言えるのではと思う。

引きこもりの子供たちが、学校に来ないねといって終わりにして、朝から晩まで家に一人でいるままにしておくのか、それこそ学校が介在して地域の誰かが見てあげているのか。一人のままになっているのだとしたら心配だ。

議長 不登校の子供が日中どのように過ごし方をしているのか情報があれば教えていただきたい。

- 委員 不登校の子供は、学校に行かないので家庭にいる。公的な組織などが家庭の中に入ることはもちろんない。
- 各家庭は、すごく四苦八苦してやっている。小学1年生でも、子供を置いて仕事に行く方もいれば、仕事を辞めたり時短にしたりといった方もいる。
- お父さんとお母さんが共働きをしているが、両方でうまくスイッチをする方も多い。小学校3年生以上になると基本的にはお子さんが一人であるのが多い。中学生ぐらいになると、反対に親がずっと家にいられても困るということもある。
- 仕事を辞める方もいれば、続ける方もいてまちまちだが、基本的には外に子供を預ける場所があるとか、そういう例は少ないと思う。
- 委員 子供のために親のどちらかが職を変えとなれば経済的な困窮に陥る。子供が引きこもって学校に行かないでいると、よっぽどの子でなければ自分で勉強するのは難しいので学力も追いつかない。
- あそこの家は引きこもりがいると言われたくないから黙っているのかもしれないが、1日8時間から10時間子供が毎日一人で放っておかれていて、それでいいのかと思う。
- せっかくの日本の人材なのでなんとかできないかと思う。
- 家にずっと一人でいて、お父さんかお母さんが作ってくれたものを昼に食べているのだろうが、こんな家は日本ぐらいなのではないか。何か解決する糸口はないのか。
- 委員 一つの対応例だが、私たちの法人で埼玉県から委託を受けている障害児等養育支援事業がある。この事業は東松山市、比企郡と県北の深谷市でおこなっている。
- 不登校のお子さんには障害を持っている方もいる。障害児等ということで、基本的には障害施策だが、守備範囲を広くして対応している。
- 深谷市の相談所では不登校のお子さんの家庭への訪問や、日曜日にパン作り教室を企画して子供たちに体験の機会を提供したりしている。こういった事業も、引きこもりの方を支援する一つの手段となる。
- 委員 数年前のことだが、鎌倉市の図書館から、いじめを受けている子供の居場所として活用してほしいという発信があり、話題になった。
- 私は図書館長を務めていて、勤務館には青少年向けの本を集めたコーナーがあるが、ひきこもりだと思われる子を見たことはない。見かけないので「どうしているかな」と逆に心配になってしまう。
- 統計が示す通り、不登校の子供は増えている。両親に問題があって子供を学校に行かせられない家庭や、両親が学校をあてにしていない家庭もある。一方で、子供自身がいじめられる等で学校に居場所がないと感じている例も見てきた。
- 不登校のおさんは家庭なり、フリースクールなりで過ごされているものと承知しているが、社会教育としても何かできるのではな

いかと感じている。図書館や公民館が、そういう子たちの居場所の一つの選択肢になるように考えていかなければならないと、皆さんの話を聞いていて感じた。

議長 図書館や公民館ができることはあるはずなので、何ができるか考えないといけない。

委員 加須げんきプラザのパンフレットを参考資料としていただいた。資料に載っている様々な課題に、げんきプラザで対応できないかと感じる。

例えば、不登校の子に居場所を提供するとか、食堂を子ども食堂として開放するとか、げんきプラザでできることはまだまだあるという感想を持った。社会教育関係団体の取組には限界がある。これだけ立派な施設を持ったげんきプラザが、団体の活動をプッシュしてくれると非常に活動しやすい。

議長 げんきプラザは既にいろいろな事業に取り組まれているが、そのなかでも私たちがこれを特に応援する、というのがあればげんきプラザも動きやすくなると思う。

委員 ここは大変すばらしい施設だ。
外国人の方々を呼んで国の料理を作ってもらって催しを開催すると凄く人気で親子が多く集まる。先ほど委員がおっしゃったとおり、げんきプラザはなんにでも使えるので、是非使ってもらいたい良い施設だと思う。

社会教育の中に不登校などの課題を抱えたの子供たちを取り組んで行くことが大事だ。青年の家と昔は言ったが、青年に達しない子供にも使ってもらえれば、地域のお城になると思う。

委員 いじめは中一が多いとのことだったが、中一になるとスマホを持つ子が増えるので、SNS絡みが多いのかなと思った。

私の娘と同じ学校の子で、自殺してしまった子がいたが、最期までSNSで友人と繋がっていたようだ。結果的にその子を助けることはできなかったが、SNSで繋がっていたおかげで、友人はいち早くその子の異変に気付くことができた。

SNSにはそういう面もあるので、取り上げてしまうのもよくない。とはいえ、いじめの道具として使われることもあるので、使い方次第なところがあり難しいと思う。

子供にどうやってスマホを使わせるかということ。部活の連絡などでも使うので必要だし、調べ物をするのにも使う。スマホを手放すのは不可能な時代になっている。

その中で、これから育つ子供たちにどのようにスマホを渡し、教育するかというのは、本当に難しい。

それと同時に、先ほど話のあった男性が子育てに協力していくという点も大切だ。私の実体験だが、3人目の子ができたときに、具合

が悪くなってしまった。

具合が悪くてお皿が洗えないと主人に言うと、「明日やればいい」と言われた。主人には自分が皿を洗うという発想がなかった。これはしっかり主人と話をしなければと思った。しっかり話して伝えたら、主人も徐々に協力的になった。

夫婦がしっかり話し合ってお互いへの理解が深まれば、お母さんの子育ても楽になっていくのかなと思った。

委員 今日資料の中で、ネット依存、ゲーム障害というのが大きな問題だと思っている。

もしかしたら不登校や貧困の問題とも関係があるのではと思う。ゲームにはまっていることで、時間をつぶしている不登校の子もいるのかなと思う。ネットやゲームを親がコントロールできないことと貧困のことも関わっているのではないか。恵まれた家庭の子供はネット依存に陥らなくて済むのだとしたら、貧困との関わりもあるのかなと思う。

ネットには功罪があると思うが、ネットに時間をすべて吸い取られてしまうのは問題だ。本来なら子供たちにはいろいろなものに目を向けて体験してほしいが、それができなくなってしまう。社会教育をはじめ幅広い分野に関われる人材がだんだん少なくなってくるのではと心配している。

私の子供には、なるべくゲームに触れる年代を遅くしたいと思っているが、実家に行くとおばあちゃんがゲームにはまっている。はまる前にどうやったら未然に防いで教育できるのかということ、学校も含めた教育機関で考えてほしい。

ネットやゲームの悪影響から子供をどう守るか、教育機関全体で考えて、学校に落とし込んでいく時期に来ている。

もう一点気になっているのは、報道などで「eスポーツ」が大変注目されていることだ。

集客力や経済効果が大変大きくなっていて、それを自治体や企業が地域おこしなどに使おうとする動きがある。本当にそんなことをして大丈夫なのかと思う。ネット依存やゲーム依存にお墨付きを与えてしまうのではないか。

そういう思いがある一方で、産業界ではGAF Aのようなネット産業が世界の企業を食い尽くすような勢いで利益を上げている。

だから、そういったことに全く触れないでも子供の可能性を狭めてしまうのかなと思う。

そういう意味で、ネット依存やSNSいじめに陥らずに上手にネットを使う方法をどのように教育するかということ、是非研究してもらいたいと思う。

議長 この問題は答えがないなと改めて思った。他にいかがか。

委員 最初のお話を伺って思ったのは、私も子育てをしながらフルタイムの勤務をして、ガールスカウトのリーダーもしていたが、本当に忙

しい。女性にかかる負担の多さは今も昔も変わらない。女性が子供を育てやすいように社会を変えてくれないかということを知りながら思っているが、現実には変わらない。

とはいえ、10年程前から、男性、女性のジェンダーに関わらず、自分ができることをやるという風に、少し社会が変わってきたなど感じる。

子供たちにとって、親の姿はお手本になる。子供たちが自己肯定感を高め、自分らしく生きるためにはどうしたらいいか。人と比べてどうではなく、私はこれがしたいしこうしていきたいという気持ちをしっかり持たせること。

ネットのこともそうだし、不登校のこともそうだが、自分の気持ちや考えをしっかり持つための力を子供に持たせるためにどうするかということを知りながら、考えなければならない時期にきている。

最近ガールスカウトで子ども食堂に関わっている。食事を作る手伝いはできないが、高校生年代の子供たちが、そこに集まってくる子供たちに、絵本を読んであげている。そういう関わりを持つ中で、やっている方も大変いい気持ちになったという報告を受けている。

そのように、子供たちが社会と繋がれる場所をげんきプラザ等に作れたらいいと思う。

本当に難しい時代で、何が正解かも分からないが、子供たちのためにできることをすこしずつ検討して、前に進んでほしいと思う。

議長

最初、子育ての話を知りながら、いろいろな「当たり前」がストレスになっているという御発言が知りながら、なるほど、と思った。そういう「当たり前」がいろいろな分野にあると思うが、それが実は当たり前ではないのだと、社会全体で気づかせる仕掛けをできないかなと思った。

人と比べずに、私は私だと肯定されることは非常に大事で、そう思える社会をどう実現するかと思いながら委員の話を聞いていた。

今日いただいた貴重な意見を基に、次年度以降県全体でどのような課題に取り組むか検討したい。

(議題) その他

委員

(アートセッション in 横瀬の紹介)

議長

本日の議事は以上で終了とする。

(施設概要説明・施設見学) 加須げんきプラザについて

加須げんきプラザ所長から施設概要説明の後、出席委員が施設見学を行った。